

関東大震災と明治大正女医

——大正12年『日本女医会雑誌第21号』より——

福嶋 正和¹⁾, 藤田 慧子²⁾

¹⁾ 障害児医療福祉センター(光陽園), ²⁾ ふじたクリニック

受付:平成28年11月22日/受理:平成29年4月12日

要旨: 関東大震災(関東災と略す)は相模湾の海底を震源としたM7.9の大震災で西は静岡県から東は千葉県に及ぶ広範な地域に甚大な被害をもたらした。特に東京、横浜には地震発生時は昼食の準備の為火を使う時間帯であり、家屋倒壊と同時に火災が発生した。折しも北陸地方を通過中であった台風の影響で旋風があり火災が全市に拡がり多くの人々が圧死・焼死するという未曾有の大悲劇となった。関東災は日本地震史上でも死者数は飛びぬけて多く初めての首都直下型地震である。関東災の被害は明治・大正女医にも及び、圧死・焼死した女医5名(一家全滅した者等)、家屋倒壊のため立ち退かざるを得なかった女医82名が記録されている。彼女らの大抵は友人、身内、患者等を失い、その悲しみは底知れない。

キーワード: 関東大震災, 首都直下型地震, 圧死・焼死, 明治・大正女医の被害

筆者らは前稿(大正女医の動向)¹⁾において大正女医(大正期に於いて医術開業試験に合格し医籍に登録された女性医師)の人生の一端について検証した。その間の大正12(1923)年9月1日マグニチュードM7.9の関東大震災が発生し被災地在住の人々(日本在住の外国人を含む)は元より日本社会に壊滅的被害を与えたことは周知の事実である。同震災が歴史的な大震災であるので筆者らは前稿で触れる予定であったが、紙幅の都合等で前稿では割愛せざるを得なかった。しかしながら、明治大正女医の人生にも壊滅的被害・試練を与えたことは想像に難くないので、同震災が明治大正女医の人生に及ぼした影響に焦点を当て本稿を上梓する次第である。

筆者らは関東大震災については一素人に過ぎないので、詳細については幾多の専門家の報告・検証にお任せしたい。関東大震災という最重要事件に触れることなく前稿を中途半端に終えたので、本稿は前稿の続編として上梓した積りである。本稿は前稿での考察に加えて関東大震災が明治大正

女医の人生に及ぼした甚大・未曾有の影響・試練に思いを馳せた。そこで本稿では関東大震災と平成23(2011)年の東日本大震災の被害を統計的に比較しつつ論を進めていき、(明治)大正女医が被った被害について検証・考察したい。

1. 関東大震災の発生・経緯

関東大震災は大正12(1923)年9月1日の昼時(11時58分32秒)に突如として相模湾の海底下で活断層すべり²⁾が起き、小田原方面から南東方向に千葉県南部・房総半島にむけて(長さ約130km, 幅約70km)地震が進行した。その地震はマグニチュードM7.9(M8.1±0.2との説もある)の規模で神奈川県、東京を中心に西は静岡県、東は千葉県、茨城県に及ぶ広範な地域に甚大な被害をもたらした。本震に続いて強い余震が12時1分(M7.2), 12時3分(M7.3)等と立て続けに発生し余震回数は千回を超えた。本震と余震でも建物の全壊が起こり多くの死者(死因は圧死)・重度傷者等が出たものと思われる。しかしながら、

最も重要な被害要因は火災であり特に東京市、横浜市では焼死が大多数を占めた。

地震発生時は昼時で大抵の家庭では昼食の準備で火を使っている時間帯であり、かまどや七輪の火を止める余裕もなく全壊した家屋から直ちに火の手が上がった。その後、東京市内は家屋を失った避難民であふれ、更に不運なことには台風³⁾が能登半島付近を通過中でその影響を受けて関東南部でも風が強くその風向き(旋風)が変幻自在で火災の勢い強く避難民の多くは逃げ場を失い焼死者の山を築いた(元陸軍被服廠跡⁴⁾等)。殆どの避難民は手一杯に荷物を携えており、荷物が燃える危険があったためそれを手放し、更に火災の熱さに耐え切れず河川(隅田川⁵⁾等)や池(吉原の弁天池⁶⁾等)に飛び込み、彼らの多くは溺死した。

また相模湾の海底下が震源地であったため神奈川県や静岡県の海岸地域には津波による被害(流失・埋没)が多数を占めた(鎌倉由比ガ浜、熱海⁷⁾、沼津等)。また土砂崩れも幾つか発生し、その被害も無視できなかつた。とくに神奈川県根府川⁸⁾での土砂崩れに客車が巻き込まれ多くの犠牲者を出したことが特記される。

この他に、当時の基幹産業であった紡績工場⁹⁾などの倒壊や火災によって女工たちの犠牲者を出していることである。地震の時間帯は昼食時勤務交代の時間に当たりあるいは夜勤後の睡眠時に当たり工場や寄宿舍の全壊や焼失が原因になったものと推定される。

更に重要なことは、朝鮮人等の外国人が「井戸に毒物を入れた」、「朝鮮人放火す」、「朝鮮人が武器をもって来襲す」等の流言飛語が拡がったことである。それらの流言は東京、横浜のみでなく、神奈川県、千葉県、埼玉県等の近県まであたかも真実であるかのように住民たちに伝わっていった¹⁰⁾。それに対して各地域では在郷軍人、消防団員、青年団等から成る自警団が組織され、無実の人々が暴行・殺害されるに至り6,000名超の朝鮮人・中国人らが犠牲者になった(方言等で日本語が不自然であるというだけで朝鮮人と見間違えされた日本人も数多く暴行・殺害された)。警察でも自警団の告発により朝鮮人を取り調べたが殆ど

は無実であったため無理やりに暴行を加えないよう自警団に警告を寄せられた。表1の9月7日の社会的動向欄には暴利の取り締まり令、支払い延期の勅令、流言浮説取締令(3大緊急勅令公布)が9月6日の枢密院会議で可決され、罰則を伴う勅令として公布された。特に流言浮説取締令では違反した者には10年以下の懲役もしくは禁固または3,000円以下の罰金に処せられたことが大きい。それでも自警団による朝鮮人暴行事件が収まらない場合には日本人を裁判にかけ罰することもあり翌月には流言もようやく収まり自警団も解散していった。また明治末期~大正初期から軍や警察が秘かに社会主義者を取り締まっていた¹¹⁾が、大震災発生後に彼らの行動に対して軍等により取り締まりが強化された。とくに労働組合員である川合義虎、平沢計七ら10名が軍によって不法検束され刺殺された亀戸事件^{12,13)}(9月3日)、大杉栄、伊藤野枝ら3名が甘粕憲兵大尉によって刺殺(絞殺?)された大杉栄事件(9月16日)等が知られている。以上の朝鮮人・社会主義者虐殺は大震災の世情不安に乗じて官憲や軍・警察が秘かに官憲にとって不都合な人間を抹殺した人為的被害であるとの説が有力である。

表1は各新聞に報道された被害状況(朝鮮人虐殺等の人為的被害を含めて)や救護活動等を新聞の日付に従って摘録したものである。但し、当時は言論統制がありそれぞれの事故・事件の新聞の日付は現実の日付と必ずしも一致しない。官憲ら関わっている可能性のある上記の亀戸事件¹³⁾や大杉栄事件はひた隠しされ、事件当日から数週後に遅れて短く報道されただけである。なお、表1の被害総数については必ずしも正確ではなく記者等の推測によるため、比較的正确な被害総数については後述の表3、4を参照されたい。

救援については全国から食料・衣類等多量救援(表1の9月4日付東京欄)、米国大統領から10万ドル¹⁴⁾援助、英国王の慰問電報(同5日付東京欄)、救援隊の活動:慶大、伝研等医師・看護婦召集(同6日付東京欄)、富豪の邸宅解放¹⁾(同6日付東京欄)、米国東洋艦隊:救援に従事・青島で食料満載、フランス軍艦の救援(同6日付その

表1 関東大震災の被害・救護状況

新聞日付	東京	横浜	神奈川県	千葉県	その他	社会動向（備考）
9月1日	11時58分大地震発生・M7.9(大毎)、12時1分余震も強烈で数十分続く	地震が原因で横浜市街に火災起こる(大毎)	神奈川県	千葉県	本日の大地震・震源地は伊豆方面(大毎)	山本権兵衛内閣閣内閣(読売)、上野で院展と二科開催(読売)
9月2日	ほぼ全区に大火災大、本所深川全滅、水道断絶(大毎)、避難命令(大毎)、近郊で列車脱線騒ぎ(北海)	大建築物殆ど倒壊・津波起り流失(大毎)、全滅に大火焦土と破壊(大毎)	横須賀海軍病院全壊(市街大半焼失・死傷多数)(大毎)		埼玉・大宮駅で圧死30名(大朝)、信州上田市で数百戸倒壊(大朝)、奈良は56時間連続20回以上(大朝)、甲府民家倒壊、多数の死傷者(大毎)、沼津被害甚大(大毎)、熱海家屋倒壊、死者600名、三休の松原、伊豆等に津波来襲数百戸流失(大朝)、震源地は伊豆半島富士火山脈(大毎)	
9月3日	猛火はまず神田神保町から、見渡す限り荒蕪たる丸の内界隈(大毎)、深川本所の大惨害、数千の死体(大毎)、東大病院焼失、患者500名焼死(大朝)、湘崎の船政者600名も焼死(大朝)、鮮人放火に助けた(大朝)、高輪御所焼けた(大毎)、苦しさで親々投身・隅田川に無数の死体(大朝)	当市焼けている最中、水道破壊・罹災民90万、食料なく餓餓に瀕す(大毎)、市は全滅、死傷者数1万(大毎)、市戒厳令(大毎)、横浜への臨時航路、救護船を続々発航(大毎)	横須賀の病院等全滅、医業に困る(大朝)、大震災の震源地は相模湾の東部と発表(大毎)、鎌倉・横須賀共に大火と津波のためほぼ全滅(大朝)	本所深川罹災民10万県にただれ込む、土気トネル崩壊・木更津火災ほぼ全滅(大毎)	埼玉県死者300名(東日)、富士紡績小工工場職工1500名惨死(大朝)、大政市議회가救護費20万円可決(大毎)、静岡県死者173名、全壊家屋1865(大毎)	猛火中の山本内閣閣内閣(大朝)
9月4日	焼失した建築物数35万、死者2万5千(東日)、大雷雨あり火と水に苦し生地獄(大朝)、全国から食料・衣類等多量救援、大火暫く消ゆ、9月3日朝(大毎)、測り難い財的損害・財界暴乱(大毎)	92・10mm津波来襲なお火船猛烈・当市の死者10万(大毎)、当市戒厳令(大朝)、横浜兵務所の囚人解放(大朝)	東海道本線の鉄道復旧見込み立たず(大毎)	千葉市全壊(大朝)	米国東洋艦隊を輸送任務に提供(大毎)、甲府に再び強震・死傷者多く大風乱(大朝)、静岡県災害地に暴風雨(大毎)	
9月5日	米国大統領から10万ドル援助(大朝)、英国王の慰問電報(大毎)、2日までの被害：全焼した各区；日本橋区、京橋区、本所区、深川区、浅草区、神田区、下谷区、青森大六区、芝区、麹町区、本郷区、四谷区、死者：10,000、傷者：100,000、地震回数：2日6時amまでに265回(大朝)、向端から焼けた永代橋上で1,000人の死(大朝)、救護班は活動継続するも、糧食不足で薬品医療材料も尽きる(大朝)、掘削を全市の罹災民に配る(大朝)、掘削を頼んだ自動車全市を回り罹災民救済	正金、県片を除く建物全滅(大朝)、横浜外国人の死者500名以上(大毎)、支那町(中華街)全滅・死者5000(大毎)	鎌倉：一徳動で疎減・地震後津波来襲(大朝)、横須賀でタンク爆発(大朝)	箱根も殆ど全滅(東日)、川崎400名惨死(大毎)、横須賀：重油タンクの火災は高1週間位続く(大朝)、足柄下郡の死傷者27,000名(大毎)	土浦駅付近で列車転覆・即死30余名負傷救護数十名(大毎)、京都府議会議決救護費25万円即決、物資を全国より大輸送(大朝)、班は軍艦扶桑にて20日分の医療携帯して出陣(大朝)、熱海線列車(第109号)海中に墜落・乗客300名溺死(大毎)	
9月6日	漂流死体河面を覆う、救護船も航行不能(大朝)、救護隊の活動：慶大、伝研等医師・看護婦召集(大朝)、富豪の邸宅解放	横浜全市で残った建築物は神奈川県検査所のみ(大毎)	木更津：死傷105、倒壊家屋3千、船山：死傷1千、倒壊家屋1万(大朝)、房総の被害甚大：死傷者2万4千、倒壊家屋4万(津波による)(大毎)、県戒厳令(大朝)	米国東洋艦隊：救護に従事・青島で食料満載、フランスマ軍艦の救援(大毎)、熱海：津波2度来襲(大朝)、埼玉取敢厳令		

新聞日付	東京	横浜	神奈川県	千葉県	その他	社会動向 (備考)
9月7日	流言飛語を取り締まる (大朝)。 中央気象台の発表：余震1039回 (大朝)。退京者20万人、内務省 (大朝)。地方に在る罹災者の家族へ (大朝)。 出京は断く見せられない (大朝)	横浜地方裁判所では裁判長、検事正執務中の者みな圧死 (東日)。	可哀想な鮮人を習志野で保護 (東日)	米国より物資大輸送 (食料、建築材料、被服材料等)、静岡県の被害：死者408名、傷者1355、行方不明62、家屋全壊2444戸、半壊4523戸、流失946戸 (大朝)	暴利の取縮令、支私延期の勅令・流言浮説取縮令 (大朝)。電話の損害3千円・完全復旧には半年~1年か (大朝)。	
9月8日	内務省通達：公務者以外外人が不可。判明死者死体すでに37,000。本所被服廠庫32,600余り、吉原遊郭2500、西神田1000 (大朝)。市の罹災戸：30万戸 = 130万人 (大朝)	横浜の死傷者11万 (全人口の1/4、大朝)	惨状を極めた相模：震災・火災・津波がほぼ同時来襲、熱海線は全線覆事故 (大朝)	安房12,000戸壊滅 (大朝)、房総半島：海底盛り上がり反対に陸が凹む (大朝)	文部省、学生に労働奉仕を要む・大学の専門学校休校 (大朝)。鮮人の爆弾実演は林橋 (東日)。	
9月9日	中央線全通に尚1か月以上かかる。救護班の主力を本所・深川に (大朝)。東大：研究材料も図書も丸焼け、明大はほぼ全焼 (大朝)。赤十字防に活動 (大朝)。警視庁救護予防の妊婦約30名のうち出産23名 (大朝)。上野の避難民15,000 (東日)	箱根登山電車谷底に墜落、多数の傷者 (大朝)	罹災市民135万・被災戸数31万6000 (東日)	英国の義捐続出 (大朝)。朝鮮から軍用糧秣 (北海)。香港、青島より救護 (大朝)。英艦日本へ送艦・医薬等積載 (大朝)。熱海に新湯噴出 (東日)	逡巡論議論 (大朝)	
9月10日	調査票の発表：罹災者：64%死体収容数65,000 (うち本所63,418) (大朝)。医師会の大動員、伝染病予防に活動 (大朝)。警視庁救護予防の妊婦約30名のうち出産23名 (大朝)。上野の避難民15,000 (東日)	外国人死者110名 (大朝)	鎌倉の惨害・倒壊と被災6700 (東日)	広東で救済決議 (大朝)。米国の排日巨頭も日本救援の旗説 (大朝) 走 (東日)	馳しき失業者・総同盟が救助に奔走 (東日)	
9月11日	救護事務局宛奉送金2千円を突破 (大朝)。避難者中に赤痢の疑わしい患者多い (大朝)。駿河台の諸病院：上野公園で免置した産婦70 (東日)	震災10日後、死者は約3万 (大朝)		各医療班、救助事業と共に秩序よく、中央線開通 (新宿=甲府=塩尻)・東海道線も開通 (大朝)	1日も早く復旧するため仮建築を命ず (大朝)	
9月12日	東京帝大の損害：375万円 (東日)・震源地：相模灘・大島と初島との中間 (大朝)。帝大中止 (東朝)、収容死体数84,114 (8日まで、大朝)。学校宛赤字重トラック校舎で授業 (大朝)	横浜再生の鍵・生糸市場の復興・1週間以内にも商談開始の意向 (東日)。外国人の死に数：支那人含めて2000余名 (読売)。阪大の救護班46名は6日間の離隊後に広島県病院診療隊と交代し12日帰阪・思いで重症骨折、チフス、火傷、次いで重症骨折、チフス、赤痢もあつたと (大朝)。昨夜から初めて点燈可 (大朝)		遭難列車：総数24列車うち9客車・即死者123名・重症後死亡8名・傷者51名 (大朝)。世界の同情：英国、米国、豪州、メキシコ等 (東朝)、米国赤十字の義金：千万円超 (大朝)	暴利を貪る大商人 (大朝)	
9月13日	後藤内相の腹案：被災地を政府で買い上げ酒造の施設後に払い下げ (大朝)。大東京復興案：選別は断じて不可。東京と横浜を合併して繁栄策を講ずるが第一案 (大朝)。職業紹介局の方針：失業者の始末火葬に付した死体数47000余 (読売)。陸軍当局：死傷も損害も日露戦争の2倍 (読売)。キリスト教婦人矯風会：世界各国から古着を集める説 (読売)。東京帝大生が罹災者の消息を調査-通知 (大朝)	厚木町の目貫は震災直ぐに出火し全焼54・即死者65名等被害甚大 (東朝)		二科、院展：京都・大阪で再開 (東朝)。横浜の代わり清水港・静岡市で研究中 (大朝)。来阪した避難者から赤痢、腸チフス等13名 (大朝)	陸軍当局談、死傷も損害も日露戦争の2倍 (読売)。暴利を貪る奸商の大檢拳 (東日)	

<p>9月14日</p>	<p>雑誌文化：雑誌社の焼失、印刷工場は秀英舎だけ残る(読売)、松本銀行局長談：紙幣に不足させぬ、原紙が燃焼(読売)、240万の人口現在(読売)、福田司令官談：戒厳令解除は見込み(毎日)(読売)、臨時看護学校長談：近く開校の望みなし(大朝)、火災は76カ所から原因は薬品、電の火・飛火(大毎)</p>	<p>被災市長談：帝都の罹災で横浜は罹れなかつた(東朝)、生糸輸出港は依然横浜に決す(読売)</p>	<p>県下の死傷者：92000余・倒壊焼失12万戸(大毎)</p>	<p>館山付近・全町瞬く間に倒壊とのこと(大毎)</p>	<p>復興四(大要項)1. 保険会社は貸付金を開始する2. 銀行は新たに貸付を開始する3. 衣食住について援助する4. 困窮者を援助する(大毎)、後藤内相談：今月中には戒厳令継続の意向</p>	<p>小運送力不足で物資流通停滞(毎日)</p>
<p>9月15日</p>	<p>震災の被害：死者7万7千・全半壊家屋5万8千・行方不明11万(12日現在、大毎)、東京外への避難民103万人・入京者39万(東日)、災害後の人口(11日現在)：1,685,324、東京帝大等各医大の文部省救護班の活動(大毎)、済生會救護班：5百万円を支出し罹病者を救護(1)病院では定員の外200名収容(2)京浜にパナック建病室を建築し800名の患者の医療(大毎)、共同し800名の患者の巡回救護(大毎)、皇后思召しで宮内省の巡回救護班の活動(東朝)、市の人口激減、震災前人口2,499,227、震災人口1,581,229(東日)</p>	<p>阪医大・大瀬良博士談：横浜市中で労働者宿所で重傷者177名を収容、治療、傷に対する衛生材料は欠乏、チフス、赤痢等伝染病は他病院に転送、重病者用便器、尿瓶等材料も欠乏して病人をみすみす悪化せざるを得ず云々(大朝)</p>	<p>県の被害：死者26,000余・倒壊家屋61,000余(横浜加える、東朝)</p>	<p>日本人の勇敢さを上海に着いた外人が称揚(大毎)、暴風雨近畿を襲い避難船遭難(大朝)、避難民収容所に人事相談所新設、大坂市社会部で1600名に職業紹介(大毎)、狂乱して子を採す若い母親、迷子の数1080人(読売)、静岡県の被害：死者1140名、倒壊家屋10150(東朝)</p>	<p>英国保険業者の決議：火災保険は支払わず、大阪歯科専門学校は歯科医師班を結成し大阪市内収容所を巡回(大朝)</p>	<p>帝都復興審議会・朝野名士20名で組織(大朝)、東京復旧予算：40~70億円、消防本部発表、88カ所から燃え上がった、消し止めたのは23カ所、放火は無い(東日)</p>
<p>9月16日</p>	<p>日赤：パナック式病院市内に6ヶ所建築、更に全国総動員へ(東朝)、三井和泉橋病院：パナック式病室建て産児科用に(読売)、求職者日に8000人更に紹介所増設(東日)、半永久的パナック式病院を市内6カ所に建て日赤の全国総動員(東朝)</p>	<p>川崎駐屯砲兵隊の活動：砲隊船退治・72隻職品数十万円(東日)</p>	<p>失業被害：求職者日に8千人・更に職業紹介所増設を(東日)</p>	<p>帝都復興審議会委員・内閣10名+外12名(東朝)</p>	<p>大阪尻無川の広場に帝都復興の警き：大工1300人と人夫200人が大車輪で急造バラックの木組みを助む(大毎)</p>	<p>雑誌は続けて発行・依然東京を本拠に(大毎)</p>
<p>9月17日</p>	<p>震災地の租税減免額：約1億2千万円(大朝)、市郡の焼失面積：10,627,200坪(読売)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>
<p>9月18日</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>	<p>東葛地域の利根川の洪水(東朝)</p>

新聞日付	東京	横浜	神奈川県	千葉県	その他	社会動向 (備考)
9月19日	<p>義金は応急施設に使用・浴場治療所市場設置(大毎)、阪医大佐多学長談:医学界のダメージ・医師の失業問題よりも更に怖いのは伝染病(大朝)、栄養研究所では罹患者に重湯・牛乳を都内数カ所で配布(東朝)、復活に驚く各百貨店向れも駆け跡にバラックで開売(大朝)、市内電車の全線の開通は半年後(東朝)</p>	<p>横浜の電車は回復殆ど不可能・手押しトロッキョコ運転(東朝)、横浜生糸初取引・250円の暴騰(東朝)</p>			<p>海賊悉く取監:盗品は2台自動車で70余回に運ぶ(東日)、伝染病漸次衰微:16日まで450名・チフスと赤痢(大朝)</p>	
9月20日	<p>志田蘭理博談:地震は再び来るものとして備蓄的設備に全力を尽くせ(大毎)、仮屋15,000余戸(読売)、愛死者調べ警視庁で纏め(東朝)、知識階級の失業者群、「書記100名入用」で押し寄せた1,000餘名(東朝)、大震災に精神障害者800名を擁して松沢病院の生地獄(東日)</p>				<p>陸船運動・遊郭の仮営業許可に腐風会義憤の裏(大朝)、馴れた医者も面食らう・日赤大阪支部から派遣の救護班憔悴して帰阪(大朝)</p>	<p>明日から開通の東海道路線・東京～沼津間10時間(大朝)、今日から東京全市へ電報配達(大朝)</p>
9月21日	<p>歴史の先生が隣接町村を行脚して「子供」の調査」・被災児童教育の準備(東日)、地震から社会主義者の検査60余名・彼らの生命保護で? (東日)</p>	<p>鮮人は芝浦へ:総督府で収容所急造(東朝)、済生会で無料の産院:東京と横浜・バラック式(東朝)</p>			<p>大学の開校期は10月15日以後(大朝)</p>	<p>焼け跡の中から新しく燃えだす社会問題:地主権問題・借家問題・敷金問題等(大毎)</p>
9月22日	<p>鉄道始と復旧:東海道路線も通し切符を売る:帰京者増加(東日)、馬鈴薯500俵騰る、慰問品が配給しきれず(この始末(東日)、日赤:日本の科学者に北京の研究所を提供、ロッキンフェラー財団が費用負担(東日)、戒嚴司令官から自警団に命令) 警察官に届け出よ2) 武器の携帯を許さぬ(読売)</p>			<p>県下の震災:死者1354、傷者2755、行方不明13名、計4122名(読売)、野田醬油連合の救済:共同廉売を始めて醬油に心配ない(読売)</p>	<p>中央職業紹介局の企画:失業者を南米へ(大朝)、大住掛けの病院船が米国から到着した・ベトナム4200(東日)、米軍軍医談:驚くほど良好な災後の衛生・チフス・赤痢だけで500名・コレララ無とは(読売)</p>	

註1:大朝→大阪朝日新聞、大毎→大阪毎日新聞、読売→読売新聞、北海→北海タイムス、東朝→東京朝日新聞、東日→東京日日新聞。
 註2:9月23日から30日は省略。
 註3:平野清介、新聞集成大正編年史、大正12年下巻9月東京:松岳社;昭和60年、P31-871(出典)。
 註4:多くの新聞項目から被害状況、救護状況等のうち、重要なものを摘録したものである。

他欄), 米国より物資大輸送(食料・建築材料・被服材料等)(同7日付その他欄), 英国の義捐続出・日本へ医薬等積載(同9日付その他欄), 夥しき失業者・総同盟が救済に奔走(同10日付社会動向欄), 救護事務局宛義援金2千万円突破(同11日付東京欄), キリスト教婦人矯風会世界各国から古着を集める(同13日付け東京欄), 東大生が罹災者の調査-通知¹⁵⁾(同13日付東京欄), 阪医大の救護班活動(6~12日)(同13・15日横浜欄), 日赤:バラック式病院6カ所建築, 三井和泉橋病院:バラック式病室建て産児科用に(同17日付東京欄), 済生会で無料の産院:東京と横浜・バラック式(同21日付横浜欄), 中央職業紹介局:失業者を南米へ(同22日付その他欄)等々の救護記事が散見される。しかし, これらの救護記事は氷山の一角であり, 地方からの入京者(現在で言う「ボランティア」)は何百万人に達したであろうと推測される。但し, 東京・横浜の壊滅的被害から由来する大混乱を避けるため, 政府は地方からの入京者の総数を制限したとのことである。これらの救護・ボランティア活動の詳細については紙幅の都合上, 参考文献¹⁶⁻¹⁸⁾に委ねたい。

2. 明治以後の日本における地震

日本は地震大国といわれ地震はM5以下の地震を含めると日常茶飯事に経験するところである。近年に経験した大地震で印象に残る地震としては阪神・淡路地震(平成7(1995)年), 東日本大震災(平成23(2011)年), 熊本地震(平成28(2016)年), 中越地震(2004)等が挙げられる。明治以後の日本における地震を死者の多い順に提示したのが表2である。

表2から明らかになったことは, 関東大震災(以下, 関東災と略す)が死者数, 家屋喪失数ともに圧倒的に多数を占め, 東日本大震災(以下, 東日本災と略す)と比較しても死者数, 家屋喪失数ともに数倍に達する。東日本災の規模ではM9.0と最大級であったにも拘わらず関東災と比較して被害が少なかったのは明治以後3回に亘って地震津波(表2の明治三陸地震, 昭和三陸地震等)の経験を先祖から受け継いでおり, 定期的防災訓

練を実施していたことによると推測される。一方, 関東災はわが国初めての首都直下型地震であり, 地震の威力が強だけでなく, 地震発生時刻が昼食準備のため火を使う時刻であり, 東京下町では地盤が緩いため全壊家屋が多く火災を起こす条件が揃っていた。更に風が強く旋風が変幻自在であったことなど複合的要因が重なって人的・住家被害を未曾有かつ歴史上最大の地震災害になったと思われる。

3. 東日本災と関東災との統計的比較

(表3(東日本災の被害), 表4(関東災の被害))

我々は平成23(2011)年3月11日に東日本災を経験し, 警察庁統計で平成28(2016)年6月10日現在の東日本災の被害状況(表3)が提示された。

東日本災は平成23(2011)年3月11日午後2時48分に宮城県沖の海底下の強い活断層ずれが生じM9.0という明治以後最大級の地震となり宮城県, 岩手県, 福島県を中心として茨城県, 千葉県等に及ぶ広範な地域に被害を残した。東日本災の特徴は本震の30分~1時間後に全被害県に津波(とくに宮城県, 岩手県では高さ10mを超える)が襲来し, 人的・家屋被害の大部分は津波が原因となったと推定される。

死者(行方不明者を含む)については, 東日本災では18,468名であるのに対して, 関東災では105,385名と東日本災の約6倍に達しており, 死因別では火災が東京市65,902名, 横浜市24,646名と焼死が大部分を占めている。一方, 東日本災では, 津波による犠牲者が大半を占めているが, 津波による被害が必ずしも全容把握に至っていないことから, 更に調査を進めていく中で被害が増加することが懸念される。

住家被害については, 東日本災で全壊12万余, 半壊約27万, 合計39万であるのに対し, 関東災では全壊約11万, 半壊10万余, 合計約21万であった。住家被害については両震災の単純比較はできないが, 関東災は火災, 東日本災は津波が主たる被害原因になったことは確実である。

一方, 東日本災では火災297件と比較的少なかったのに対し, 関東災では9万余と圧倒的多数

表2 明治以後の被害地震10傑(死者・行方不明者数順)

No.	西暦	月	日	地震名	M	死者数	家屋 喪失数	主な 被害原因
1	1923	9	1	関東大震災	7.9	105,385	293,347	火災
2	1896	6	15	明治三陸地震	8.5	21,959	8,891	津波
3	2011	3	11	東日本大震災	9.0	18,468	121,806	津波
4	1891	10	28	濃尾地震	8.0	7,273	93,421	震動
5	1995	1	17	兵庫県南部地震	7.3	5,502	100,282	震動
6	1948	6	28	福井地震	7.1	3,728	39,342	震動
7	1933	3	3	昭和三陸地震	8.1	3,008	4,035	津波
8	1927	3	7	北丹後地震	7.3	2,925	11,608	震動
9	1945	1	13	三河地震	6.8	2,306	7,221	震動
10	1946	12	21	南海地震	8.0	1,432	15,640	津波
11	1944	12	7	東南海地震	7.9	1,223	20,476	津波
12	1943	9	10	鳥取地震	7.2	1,083	7,736	震動
13	1894	10	22	庄内地震	7.0	726	6,006	震動
14	1872	3	14	浜田地震	7.1	552	4,762	震動
15	1925	5	23	北但馬地震	6.8	428	3,475	震動
16	1930	11	26	北伊豆地震	7.3	272	2,165	震動
17	1993	7	12	北海道南西沖地震	7.8	230	601	津波
18	1896	8	31	陸羽地震	7.2	209	5,792	震動
19	2016	4	14	熊本地震	7.3	110	8,424	震動
20	1983	5	26	日本海中部地震	7.7	104	1,584	津波
21	1914	3	15	秋田仙北地震	7.1	94	640	震動
22	2004	10	23	中越地震	6.8	68	3,174	震動
23	1968	5	16	十勝沖地震	7.9	52	641	震動
24	1909	8	14	姉川地震	6.8	41	978	震動

註1: 家屋喪失数は全壊・全焼・流失・埋没などで完全に失われた家屋数。

註2: 出典は「宇津徳治. 地震の事典. 東京: 朝倉書店; 1987. p.456」を一部修正, 1987以後の4地震追加。

註3: 兵庫県南部地震=淡路・阪神地震。

註4: 関東大震災は諸井隆文・武村雅之著「日本地震工学会論文報告集」第4巻(平成16年)による。

註5: 濃尾地震の全壊数は飯田淑事「東海地方地震・津波災害誌」(昭和60年)による。

註6: Mはマグニチュードを表す。

註7: 死者数には行方不明者を含む。

を占めた。この原因は東日本災では午後2時48分と家庭で火を使用する時間帯を2時間以上過ぎていたのに対し、関東災では前述のように火の使用時間帯の間中であつたことによることは明らかである。

表3, 表4においてB/A×100(人口に対する死者+行方不明者の%, 死亡率)では関東で東京市3.159%(東京府1.903%), 横浜市6.295%(神奈川県2.481%)となっており横浜市, 東京市において死亡率が高いことが示唆される。更に両市の死亡率を比較すると横浜市の死亡率が東京市のその2倍に達することが判明した¹⁶⁻¹⁸⁾。一方, 東日本災の死亡率は宮城県0.459%, 岩手県0.436%

(福島県0.089%)と低値を示し関東での被害が如何に未曾有であつたかが統計上も明らかである。

これらを総括して両震災の比較から学べることは次の通りである。

東日本災では過去の経験から日常的防災訓練によって人々の防災意識を高めたことと津波による犠牲を最小限にしたと思われる。

関東災では地震発生の時間帯が火を使用する時間帯でM7.9の首都直下型地震であつたため火を消す余裕が無かつたことから東京市や横浜市の火災を拡大した要因になつたことで地震直後の火消を教訓とすべきである。

表3 2011 東日本大震災の被害（警察庁統計より 平成28年6月10日）

都県	人的被害					重傷	軽傷	傷合計	住家被害					
	府県別人口(A)	死者	行方不明者	死者+行方不明者(B)	B/A×100(%)				全壊	半壊	火災	床上浸水	床下浸水	一部破損
岩手	1,330,147	4,673	1,123	5,796	0.436	不詳	不詳	213	19,597	6,571	33		6	18,939
宮城	2,348,165	9,541	1,234	10,775	0.459	不詳	不詳	4,145	82,999	155,131	135		7,796	224,195
福島	2,029,064	1,613	197	1,810	0.089	20	163	183	15,172	79,084	80	1,061	351	141,485
茨城	2,969,770	24	1	25	0.000	34	678	712	2,629	24,369	31	1,799	779	187,103
千葉	6,216,289	21	2	23	0.000	29	229	258	801	10,152	15	157	731	55,044
東京	13,159,388	7		7	0.000	20	97	117	15	198	1			4,847
その他		15	17	12				524	593	2,365		6	6	94,563
合計		15,894	2,574	18,468				6,152	121,806	278,575	297	3,023	9,669	726,176

註1：津波により水没した地域があり全容把握に至っていない。

註2：平成23年4月末までの余震による被害を含む。

註3：死者の一部は全壊による圧死も含まれると推定されるが、死者、行方不明者、床上浸水、床下浸水等の多くは津波によると推定される。

註4：岩手、宮城の人的被害のうち重症・軽傷の別は不詳につき合計のみを記載した。

註5：府県別人口は次の文献を参照した；総務省統計局編 平成22年国勢調査最終報告書「日本の人口・世帯」（下巻一統計表編）平成26年6月発行。

表4 関東大震災の府県別被害・救護状況

府県	住家被害棟数						合計	総人口(A)	死者（行方不明者を含む）					
	全壊	(うち)非焼失	半壊	(うち)非焼失	焼失	流失埋没			住家全壊	火災	流失埋没	工場等の被害	合計(B)	B/A×100(%)
神奈川県	63,577	46,621	54,035	43,047	35,412	497	125,577	1,323,390	5,795	25,201	836	1,006	32,838	2.481
東京府	24,469	11,842	29,525	17,231	176,505	2	205,580	3,699,428	3,546	66,521	6	314	70,387	1.902
千葉県	13,767	13,444	6,093	6,030	431	71	19,976	1,336,155	1,255	59		32	1,346	0.101
埼玉県	4,759	4,759	4,086	4,086			8,845	1,319,533	315			28	343	0.002
山梨県	577	577	2,225	2,225			2,802	583,453	20			2	22	0.000
静岡県	2,383	2,309	6,370	6,214			9,259	1,550,387	150	171	123	444	0.029	
茨城県	141	141	342	342			483	1,350,400	5				5	0.000
合計	109,673	79,693	102,676	79,175	212,348	570	372,522		11,086	91,781	1,013	1,505	105,385	
(うち)														
東京市	12,192	1,458	11,122	1,253	166,191		168,902	2,173,201	2,758	65,902			68,660	3.159
横浜市	15,537	5,332	12,542	4,380	25,324		35,036	422,938	1,977	24,646			26,623	6.295
横須賀市	7,227	3,740	2,514	1,301	4,700		9,741	89,879	495	170			665	0.74

註1：住家被害棟数の合計は非焼失と焼失の重複を避けるために、非焼失分、焼失、流失埋没の合計とする。

註2：出典は「北原糸子以下10名編。地図にみる関東大震災。武村雅之。関東大震災の真実を伝えるために。東京：日本地図センター。平成25年。P62。

註3：表のうち流失埋没は神奈川県や静岡県を襲った津波によると推定される。

註4：北海道、青森県、群馬県、長野県、栃木県等も被害あるも軽微であるため省略した。

註5：印刷局内朝陽会（池田敬八）帝国の人口 道府県郡島嶼市区町村別人口（大正9年10月1日現在）大正10年12月。

4. 関東大震災における明治大正女医

当時、大抵の明治大正女医は日本女医会の会員であり、関東震災直前（大正12年前半）の日本女医会雑誌の会員名簿¹⁹⁾によると会員数は730名（そのうち住所不詳の95名を除いた635名）であ

る。そのうち被災府県の在住者は合計268名（東京市146、東京府54、横浜市13、神奈川県11、静岡県18、千葉県9、茨城県7、山梨県5、埼玉県5）である。以上の1府6県には日本の明治大正女医のほぼ36.7%が在住していたことになる。そのうちでも過半数（146人、54.5%）が東京市に在住し

ていた。関東災後の会員名簿を検証した²⁰⁾が、統計的資料を見出すことは出来なかった。しかし、医海時報(1923年10月6日)によれば、東京、神奈川、静岡、千葉、埼玉等の1府5県下における大震災による男女医師の総死亡者は約4000²¹⁾とされている。

横浜市に在住した医師(男女を問わず)の死亡を報じた各誌の記事について概観しておきたい。医海時報(1923年9月23日)²²⁾によれば、9月23日までに分明せる医家の圧死もしくは焼死者の総数は20名で死亡者の住所と実名を挙げている。更に東京医事新誌(1923年10月6日)²³⁾では、横浜市内罹災惨死者25名を実名表示で報じている。東京市では更に多くの医師が惨死したものと推定される。ここに万死に一生した日比野傳平医師の遭難談²⁴⁾を医事新聞から引用しておきたい(註24)を参照されたし。

関東災は記述のごとく特に東京、横浜等に集中的かつ未曾有な被害を及ぼしてきたが、明治大正女医も東京を中心に在住していたことから関東災に直面して多大な被害を被ったであろうことは想像に難くない。そのため、日本女医会雑誌の中から直接的死者の記事や女医の被害体験談から関東災の壊滅的被害を引用させていただきたい。

(1) 関東災の直接的死者²⁵⁾

女医の直接的死者は5名(明治女医1名、大正女医4名)であったが、災害関連死は比較的新しい概念で大正時代にはその概念が無かったので災害関連死数は不明と言わざるを得ない。

① 沖本幸子(明治女医)

明治6(1873)年生 土佐国幡多郡下田村出身
享年52歳

履歴：済生学舎出身、明治33年(1900)秋医術開業試験合格、同38年(1905)東京府腰越に開業(小児科・内科)。

罹災当時：家屋倒壊し、その下敷きとなり、更に忽ち火災となり焼死。

家族：母堂および養子(慶大医学部卒業前)があったが、女医と養子は共に圧死した。母堂

のみ残されるも女医の妹あり鎌倉に嫁していたとのこと。

② 姑射牧子

明治23(1890)年生 神奈川県横浜市出身 享年33歳

履歴：神奈川県等女学校卒業。

明治43年医学を志す。其動機は母君産婆にて開業せらるる為産婦人科医たらんと希望を有せられし如し。

私立日本医学校に学び大正3年医術開業試験及第。

研究先、岐阜県恵那郡の某病院、横浜市桜橋病院、東大小児科傍生。

開業、大正6年横浜市三春町に於て、産婦人科小児科専門。

罹災当時：二階落ち家族(夫、次女、雇人3名)全滅(長女だけは大磯に在り助かる)、後全焼。

③ 奥寺たけ子

明治25(1892)年生 神奈川県出身 享年31歳
履歴：明治38年4月神奈川県立高等女学校に入り同42年3月卒業。

同45年4月東京女子医学専門学校入学、大正5年7月同校卒業。

其後奥寺氏と結婚し群馬県山田郡大間々町にて開業。

大正10年横浜市福富町1-16へ転居開業。

罹災当時：自宅にて患者診察中第一震にて家屋倒壊、家屋の下敷きとなり、かつ隣家より発火し忽ちの間に燃え移り焼死とのこと。

④ 赤坂美佐子

明治29(1896)年生 東京出身 享年27歳

履歴：明治45年3月日本橋高等女学校卒業。

同年4月東京女子医学専門学校入学、大正5年7月卒業。

大正6年1月より大学病院小児科に入り介補として大正9年12月まで勤務。

同10年本所横網町にて父君と共に開業。

罹災当時：最近養子を迎えられ、当時妊娠十ヵ月であった。本所被服廠跡に避難されるも両親を初め火災にて一家7人ともに焼死。

⑤酒井いく子

明治 32 (1899) 年生 埼玉出身 享年 24 歳
履歴：大正 4 年 3 月埼玉県立浦和高等女学校卒業，大正 4 年 4 月東京女子医学専門学校入学，同 8 年 7 月同校卒業。

同 9 年 4 月より岐阜県恵那郡中津町病院医員として勤務。同 11 年 12 月帰京。

罹災当時：大正 12 年 3 月より本所区江東病院に勤務，当日も勤務中，関東大震災のために患者と共に殉職。

以上の女医 5 名は医業勤務中に家屋倒壊下敷きとなり，その直後に火災が起き焼死あるいは自宅から避難したが火災が襲い掛かり焼死したものである。筆者は衷心から 5 名の冥福を祈念するものである。

(2) 女医の被害体験談

最後に，関東による明治・大正女医の被災状況について触れておきたい。関東災の被害状況として最も実感されるのは被害者自身が記述した体験談である。日本女医会雑誌「震火災通信」²⁶⁾として記載された被災者の体験談が読者の共感を呼ぶものと思われるので原文通り公表したい（人名以外は当用漢字及び新かなづかいに訂正，候文はそのままにした）。

①飯高貞子（浅草）：漸く身を以て逃れ今は「北千住四丁目」前田宅にお世話に相成居候，追て元の場所に再建築帰院申度く考え居候。何しろ田中町は最も早き火事にて何を出ず暇もなくいやはや誠に閉口致し申候云々。

②森りう子（本所）：私共被服廠なる所に避難致し候に就き少しく怪我致し候え共三週間程療養致し目下全快致し候云々。

③浜部しが子（府下小松川）：私事は九月 1 日には和不変河本先生の御宅に参り居り震害は無事に過し候も帰途兩國迄来り火事に取り廻され辛うじて深川岩崎公園に避難地仕候。三日正午無事に帰宅仕り候も間もなく郷里鳥取市水害の新聞に驚き妹を連れ帰国致候処幸に人命には別条

なく候えども家屋の破壊甚だしき為其修繕の取込みやら道中の困難やらに帰郷後自宅の修理昨今殆ど疲労状態にて云々。

④石島栄子（茨城県土浦町）：当院にても七日来新築中の処大震の為諸所大破損を受け云々。

⑤鼓千代子（広島県）：私も弟三人（小田原に開業一人，東京本所に開業一人，全焼にて二軒とも困難，横浜も之は開業には非るも全焼）殆ど兄弟三人丸焼にて閉口致し居候。

⑥高橋雄子（京城）：（前略）私方長男も御地に遊学中丸焼となり浴衣一枚にて帰宅いたし申候。

⑦栗山一枝（和歌山）：此度は思いもかけぬ大震災にて誠に何と御見舞いの言葉も御座無く候。京浜地方の多数の会員諸姉の上にも様々な御気毒な方が多かろうと存じます。赤坂姉，奥寺姉は私共と同じクラスの方にて一入り感慨深く候。右の方々ご慰問の為御骨折下され御礼申上候。當地方に於きましても初回五百戸程の私の村にて義金を募り千二百円として，尚婦人会及医師会にて最近蒲団及裕類の慰問品を集める為めその一員として働き居り廿三日発送致したる次第にて関西方面にても夫々盛んに活動致し居り候。

⑧田口あき子（小田原）：当地は震災害に於いては最大強度なりしとの事なれど家屋は皆倒壊全滅にて且火災は小田原の約三分の二以上は消失致し実に惨憺たる有様に御座候。併し私宅は幸いにも火災は免れ候えども家は全壊にて殊に女中一人圧死の不幸を見るに至り候えどもその他は皆少し位の怪我にて生命丈は無事に御座候（後略）。

⑨仁保澄江（横浜市）：医院は火災に罹りましたが人員全部無事でございます。只今全部「横浜市青木町下台 59」に避難して居ります。

⑩水野鶴子（浅草橋場町）：私方一同無事避難致し候えども家屋並に家財は全部焼失只々身を以て逃れしのみにて御座候。

⑪福井良子（下谷区稲荷町）：先月二日病院全焼と共に罹災致し候えども幸に入院患者にも一人の怪我も無く全員無事富士前町古沢控家に避難致し，本月四日友人の方へ参る事に相成静養致

居候(後略)。

- ⑫種坂章子(府下大島町):私方居宅は火災こそ免れ候も全然倒壊し殊に地割れにて濁水湧出し家財道具は勿論夜具蒲団衣類までも満足なものなく其損害甚だしく殊に家族には下敷となり大負傷を致し云々。
- ⑬舟木いゆ子(向島):昨秋以来向島に在って石崎博士につき修業中の所病院も自宅も全焼只今は「府下寺島町」立退いて居ります。
- ⑭武田いくの(千葉県):私方にて東京につぐ有様にて漸く家人は無事に逃れ候え共家は大破損を受け住家は住われぬ迄にこわれ土蔵は潰れ諸道具皆壊れ僅の私の立場に於ても機械、戸棚、薬戸棚は倒れ皆こわれ暫く業を休み居候次第。
- ⑮武田琴子(千葉県):当方は深川の本宅、本院共に全焼、家族一同辛うじて四日に「千葉県東金町岩崎」の分院の方に逃れ候も家族、患者等には負傷者もなく云々。
- ⑯本田浪子(横須賀市):当方は全焼の憂目に遭い身を以て逃れ候も幸一同無事「横須賀市中里200」の所に移転仮診療所を設け開院致し居り候。
- ⑰市川田鶴子(深川区洲崎):(前略)去月十七日迄は上野林光院に避難致し居り候いしも当地親戚の者共其迎えに参りくれ候を幸万難を排して十八日「長野県西筑摩郡大桑村字野尻野上」に引き上げ参りたる次第に御座候。急死の中に私始め娘孫等は無事に候いしも肝心の孫等の父に当たり候者往診先にて梁の下になり其儘に相成候。折も折とて其最後も見届け得ず火に追われて逃げ廻りたる次第残念至極の事に御座候云々。
- ⑱風間種子(麴町区元園町):私方も全焼致し候漸く「府下巢鴨町上駒込165」の所に来月一日より移転致す事に決定致候。

以上の女医18名のうち全滅・全焼の被害を被った者が大半で、とくに火災による被害(全焼)が関東災の被害の主因を成している。この18名の記述から火に追われて家族、雇人等と共に逃げ

廻ったことがリアルに伝わってくる。

⑦栗山一枝は和歌山県在住のため被害は皆無であったが、500戸程の村から1200円の義援金を集め、関西方面にも活動を拡げているとのことであった。更に日本女医会雑誌の記事²⁷⁾によれば、特に関西女医会から10月26日付けで寄付金1,675円を送付したとのことである。当時から精力的なボランティア活動が力強く芽生えていたことを示している。

更に日本女医会雑誌の記事²⁸⁾によれば、罹災諸姉姓名並に立退先を提示している。提示された女医数は82名であり、自宅・医院が全壊・全焼したため立ち退かざるを得なかったものと思われる。しかし、その数は女医会で把握している数で会員の全壊・全焼せる総数の氷山の一角であろうと思われる。立ち退き先は身内あるいは友人宅であろうと思われる。

総括

本稿では、1) 関東大震災の発生・経緯、2) 明治以後の日本における地震、3) 関東大震災と東日本大震災との統計的比較の順序で記述し、特に東日本大震災を引き合いに出して関東大震災を比較しようとしたが、筆者の筆力不足を痛感した次第である。

表2で「明治以後の日本の地震の被害」の中でも取り分け突出した死者(行方不明者を含む)を出した首都直下型大震災に人間の無力さ、特に地震時の火災を最小限に抑える努力が重要であることを痛感した。

本稿の上梓に当たり、平成まで90年以上生きた大正女医の懐古談²⁹⁾を参考文献として紹介して筆を置きたい。

謝辞

本稿を書き進めるに当たり、東京女子医大史料室、千葉県立西部図書館、我孫子市民図書館の職員には参考文献等についてのご助言に深謝申し上げたい。

注・参考文献

- 1) 福嶋正和・藤田慧子, 大正女医の動向, 日本医史学雑誌 2016; 62(4): 363~394
- 2) 活断層: 地球の表面は活断層(プレート)と呼ばれる岩の層に覆われており, 日本列島には太平洋プレート, フィリピンプレート(以上は海のプレート), 北米プレート, ユーラシアプレート(以上は陸のプレート)から成り立っている. 海のプレートは陸のプレートの下に沈み込んでずれ動き, 陸のプレートの先端部が跳ね返るが, この時の衝撃で起きるのが「海溝型地震」で2011年の東日本大震災がこれに当たる.
- 3) 大正12年9月1日正午頃に能登半島海岸沿いに弱い台風(997hPa)があり, その影響により関東南部にもやや強い風が吹いていた. 地震発生直後, 東京で南南西12.3mの風があり風向きは西風, 北風と変わって夜には最大風速22mまで強まった. 強風, 風向きの変化により焼失域拡大の要因となった.
- 4) 元陸軍被服廠跡: 約2万坪の広大な空地, 本所区(現・墨田区)横網町は大正8年に陸軍から東京市に払い下げられ, 近いうちに運動公園として市民に開放される予定であった. 関東大震災の避難地として4万余の避難民が殺到し, 立錫の余地なしの状態となった. そこに3方から火災が襲い掛かり3万8千人に及ぶ焼死者が出るという同震災の最大の惨事となった.
- 5) 自宅が全壊・全焼した避難民は火災に追われて逃げ惑ったが, 火災の熱さに耐えきれず隅田川等に飛び込んで溺死した.
- 6) 吉原でも地震発生直後に倒壊・火災が起こったが, 経営者は遊女が吉原遊郭内から外に避難することを許さなかった. そこで遊女は狭い遊郭内を逃げ廻ったが, 火事の熱さに耐えきれず郭内の弁天池に飛び込んで多くは溺死した.
- 7) 関東大震災では12m高の津波が来襲し, 熱海町で155戸(12.7%)の被害, 92人の死者・行方不明者が出た.
- 8) 東京発真鶴行第109列車が東海道線根府川駅のホームに差し掛かったところ, 関東大震災によって引き起こされた土砂崩れによる土石流に遭遇し海側に脱線転覆し乗客・駅勤務職員112が死亡(行方不明者を含む)した(根府川駅列車転覆事故).
- 9) 当時の紡績工場では人手不足のため多数の女工(主として東北の農家出身)を雇用し週交代で一日12時間労働・昼夜交代制で勤務させていた. その例として富士ガス紡績工場の保土ヶ谷工場を挙げておく. 勤務交代のため工場間の廊下を移動していたところ, 地震の大きな揺れでレンガ壁が倒壊し, 女工454人が圧死した. 同様の要因で100人以上の犠牲者を出したのが, 同紡績工場・川崎工場他の4工場に及んでいる. 女工たちの厳しい労働条件が緩和されたのは昭和4年になってからである.
- 10) 永沢道雄 大都市が震えた日 東京:朝日ソノラマ; 2000 p.160~163, 172~184
- 11) 日本共産党が結成されたのは大正11年7月であった.
- 12) 糸屋寿雄 日本社会主義運動思想史II 東京:法政大学出版局; 1980 p.29~31
- 13) 同上 p.32~34: 亀戸事件は軍や警察による社会主義者虐殺事件であるが, 彼らは事件が公になるのを恐れ報道を規制し10月中旬になるまでひた隠しにした.
- 14) 大正13年の為替レートによれば, 1ドル≠2.63円となっており, 従って10万ドルは約26万3千円に相当する.
- 15) 鶴田一郎 関東大震災時の学生の救護活動—東京帝国大学学生救護団を中心に— 広島国際大学教職教室論叢 第7号 2015, 81~88
- 16) 吉村昭 関東大震災 東京:文芸春秋; 1979 p.93~95
- 17) 今井清一 横浜の関東大震災 横浜:有隣堂; 平成19年 p.16~48
- 18) 鈴木淳. 関東大震災(消防・医療・ボランティアから検証する). 東京:講談社; 2016年
- 19) 日本女医会編 日本女医会雑誌 第20号 大正12年6月10日 p.62~81(日本女医会会員名簿)
- 20) 日本女医会編 日本女医会雑誌 第21号 大正12年12月10日 p.30~51(日本女医会会員名簿)
- 21) 田中義一. 被災府県の医家大震災の横死者数. 医海時報. 1923年10月6日
東京・神奈川・静岡・千葉・埼玉等1府5県に於ける約4千の医家各位は今次の大震災により(中略)中にも圧死焼死等の大惨害を被られ云々とある.
- 22) 横浜市内開業医家の横死数. 医海時報. 1923年9月23日: p.1833
「今日まで分明せる圧死もしくは焼死者の総数は左記(中略)のごとく20名にして此家族(看護婦を合して)を併せて約80名内外に達すべしと. その他罹災者は立退先不明なるを以て的確には知ることを得ざるも, 二百八九十名位なるべき見込み也。」と報道されている.
- 23) 横浜市内罹災惨死者. 東京医事新誌. 1923年10月6日: p.1586
横浜市は惨害東京より激甚にして同市在住25氏は1日(筆者註:9月1日のこと)いずれも不幸圧死を遂げられたり(以下, 省略)と報道されている.
- 24) 医家罹災当時の苦心談(日比野傳平氏談). 医事新聞. 1923年10月25日: p.1170
(前略)とに角, 五日(筆者註:9月5日)亀戸の親戚の所で, 被服廠内にいる時三度旋風に巻き上げられ, 三度目に人事不詳に陥り, 右腕をとられて両腕を焼き右の乳から脇の下, それからかけて背中へ大火傷をうけ, 右の膝関節外側にも傷をうけて一時

は丹毒を併発し、今月の十日まで動けなかった家内と右肩骨を折って手が利かない妹(中略)、家族の中、一人の倅を失った外に、通いの代診が子供二人を残して夫婦で死に書生が二人は黒焦げになり、(中略)最後に私の住んでいた近所、二三丁の町内には十二三人の同業の士があったが、殆んど全部全滅の悲惨な目に逢っています(後略)。

- 25) 日本女医会編 日本女医会雑誌 第21号 大正12年12月10日 p.10~12(本会員中災死者の略歴付遭難当時の状況)
- 26) 同上. p.6~10(震火災通信)
- 27) 同上. p.13(関西女医会,名古屋女医会よりの慰問)
- 28) 同上. p.8~10(罹災諸姉姓名並に立退先)
- 29) 養老静江. 紫のつゆ草(ある女医の90年). 鎌倉;

かまくら春秋社. 1992. 61~68(関東大震災)

著者は1922年12月14日に第49950号で医籍登録(旧姓大塚静江で官報記載)し、震災当時は東大小児科に勤務していた。著者は横浜本牧の海辺で友達が経営している旅館に滞在しているときに大震災を体験したとのことである。大震災の体験を次のように記述している:(前略)何とも言えない物凄い音と、家全体が土台から突き上げられる激しい揺れとともに、天井が頭上にせまって来る感覚にとらわれました。海に向かって家は横倒しになり(後略)。その他は著者のプライベートな生活(例えば、結婚、開業一往診のエピソード等)を赤裸々に記述しており、大正末期~昭和初期の一大正女医の生活実態の一端を知るうえで好著である。

The 1923 Kanto Great Earthquake and Women Medical Doctors Who Were Registered during the Meiji & Taisho Eras (1885 to 1923)

Masakazu FUKUSHIMA¹⁾ and Keiko FUJITA²⁾

¹⁾Tokatsu Medical & Welfare Center

²⁾Fujita Clinic

The 1923 Kanto Great Earthquake was a great earthquake of Magnitude 7.9 which reached from Shizuoka to Chiba-Prefecture. Especially in Tokyo and Yokohama, the earthquake occurred in the time when people used fire for the preparation of lunch, and therefore both large-scale fires and destruction of houses occurred at the same time. Furthermore, a whirlwind occurred because of the influence of a typhoon. The fire spread almost throughout the whole city and many people were crushed or burned to death. The damage incurred by women medical doctors was as follows: 5 direct deaths (crushed or burned to death), 82 removals because of house-destruction and fire. Most of them lost many friends, relatives, patients, and so on.

Key words: 1923 Kanto Great Earthquake, great earthquake in a metropolitan city, crushed or burned to death, women medical doctors who were registered during the Meiji and Taisho eras